

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム
第6回 外部評価委員会の概要

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラムでは、第三者の視点からプログラムの運営についての評価を行い、その意見をプログラムの改善に反映させることを目的として、外部評価委員会を設置いたしました。ここに掲載するのは、平成30年1月26日開催の第6回外部評価委員会における評価・意見の概要です。

外部評価委員会の場で得られた評価・意見を、グローバルに活躍できる人材育成を目指す本プログラムの発展と進化に役立てていきたいと思っております。

なお、外部評価委員は以下の通りです。

(文責：超域イノベーション博士課程プログラム 自己点検・外部連携ワーキング)

外部評価委員 [五十音順、敬称略、役職名は、委員会開催当時のもの]

上野山 雄	パナソニック株式会社 顧問
岸本 喜久雄	東京工業大学 環境・社会理工学院 学院長 教授
齊藤 紀彦	株式会社きんでん 相談役
大坊 郁夫	東京未来大学 学長
中野 健二郎	京阪神ビルディング株式会社 取締役会長
広渡 清吾	公益財団法人日本学術協力財団 副会長

講評の概要

項目	内容
プログラムの成果	<p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> 本取り組みでは、どのような教育を具体的に実践しようかとの検討からスタートし、この6年間を経て、充実した内容のカリキュラムをつくりあげたと評価する。内容が充実しているだけでなく、優れた教育効果の期待できるプログラムに仕上げられている。特に、「超域イノベーション総合」、「超域イノベーション実践」は、履修生による具体的な成果発表から判断すると、博士課程の学生だからこそ成し遂げた内容となっている。おそらく、同様のことを学部教育で実施しても、ここまでは深く踏み込めなかったのではないと思われる。博士課程の学生として、専門性を身に付けた上で課題に取り組んだということが有効な点であり、加えて、他分野の学生と一緒に取り組んだということが非常に大きな教育効果になったと思われる。これによって、博士課程の学生を育てる一つの効果的な教育モデルができたと評価できる。 リーディング大学院プログラムとして、各大学で様々な試みがなされているが、本取り組みは、実学に重きを置く大阪大学としての特色が自然に出ている。それが、本取り組みを他の大学のそれと比較したときに、優れた点になっている。 4年間、外部評価委員会に参加したが、毎年、先生方がプログラムを進化させ、それを実践し、また、履修生の方々がそれを受けとめ超域の目的に沿った方向に進んで行かれたことは、履修生の発表や懇談での対話で理解することができた。短期間の間にダイナミックに講義内容を変化させ、結果に結びつけられたことは高く評価できる。 担当者が履修生の状況を踏まえ、カリキュラムを進化させてきた点は優れている。得てして当初設定したプログラムに拘泥しがちだが、開講科目を学年によっては柔軟に変更を加えている。履修生の理解度を高めるためにも有効であったと言える。 本プログラムは、大学院教育における新たな挑戦として、社会におけるオールラウンド型のリーダーを養成することを目的に掲げてきた。専門力の基盤の質的水準を引き上げつつ、全体を見渡す俯瞰力を強化し、知識とスキルを統合して、「未知で複雑で困難な社会課題の解決」を目指し、かつ、実現する力を教員と履修生の協働作業および履修生の独自活動を通じて、履修生が自らのうちに育て上げること、これが本プログラムの取り組みにおけるもっともすぐれた特徴であり、今年度の成果としてあらためて確認することができた。 プログラム独自のコースワークとして設計された「超域イノベーション総合」および「超域イノベーション実践」における履修生の具体的な取り組みは、一方で解決を迫られる社会課題が既存の学術的知見を超えてそれを総合する実践的視点からはじめて見出しうるものであること、他方でその社会課題の実践的解決のために既存の専門知、既存の科学性を超えて新たな俯瞰的な知が必要であることを履修生たちに認識させている。このような認識こそ、履修生たちの実践的取り組みがそのまま社会課題の一定の解決に結果するものであるか否かを問わず — これはその課題の困難さに関係する —、本プログラムのもっとも特徴的で、重

	<p>要な成果であるとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特に6期生では大学からの補助が減額されることを知りながらプログラムを履修していることは履修生の覚悟の強さと言える。履修生は覚悟があってこのプログラムを続けているのは、これまでの先輩達の学びの良さを理解してのことと言えよう。偏にプログラム担当者の貢献および履修生の真摯な取り組みに対して敬意を表する。 ・ このプログラムを選択して、専門の博士課程と両立して受講した履修生のチャレンジ精神に心強く思う。恐らく現在の過程では実感できなくても、今後の過程で「履修して良かった」と思えるのではないか。誰しも、何が良かったかは、後で実感できるものであり、教授陣のこのプログラムを試行錯誤の中で逐次構成されたことに敬意を表したい。文部科学省の指導や補助金の制約の中で、大阪大学らしい独自のプログラムを構成し、ある意味「大学改革」の先鞭になる博士課程での6年の挑戦は素晴らしいものであったと評価している。
履修生の成長	<p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本プログラムは専門力（深さ）と汎用力（広さ）を兼ね備えた高度人材の育成を目指すものであり、履修生にとっては研究科と本プログラムのいわば「二足のわらじ」を履かせることとなったが、履修生達は力配分のバランスに悩みつつも本プログラムの意義をよく理解したうえで活動を継続し、1期生からは履修後の学位や卒後キャリアの取得に至る者も出た。二足のわらじを履きこなしその努力を高く評価するとともに、そこから彼等が得たものは誠に大きいと、彼等との自由懇談や活動結果発表を通じて実感し評価している。履修生達をここまでひきつけたプログラムを準備し、指導された教授陣、ならびに履修生が所属する研究科の指導陣の双方のご尽力を多としたい。 ・ 本プログラムが目指す理念に「文理統合」があるが、これは広く言い換えれば、外部・他分野・異文化の意見に冷静に耳を傾け、自らの向上に資するものは取入れ、軌道修正する度量を養うということであろう。このプログラムでは、「超域イノベーション総合」で他専攻のメンバーとチームを組み、また「超域イノベーション実践」では特に海外の人達と交流する中で課題に取り組んでおり、履修生との懇談の中で「このプログラムの活動では課題（agenda）設定が重要で、そのためには自分が目指すもの（価値、価値観）をしっかり描くことが不可欠である。その点で他分野のメンバーと話をすると、課題の捉え方が全く違い、視野が広まった。」との履修生の発言は、本プログラムの効果を裏付けるものと評価できる。 ・ 毎回の外部評価委員会で感心するのは、大学院生の成長があることだ。教授陣の新しい大学院を創設するのだという強い意識、大学トップ陣の理解、また強弱はあっても学内の支援、理解から、努力の結果、6年を経過した。毎年、各期の履修生との懇談で話を聞いていると年次が上がるにつけ、その姿勢、積極性、特に好奇心溢れる履修生に接して心強い。この履修生達には、将来どう伸びて各分野の若手リーダーになるのだろうかという期待が大いに持てる。 ・ 履修生は一年間で確実に伸びていることを実感した。たくさんの要因があるが、自分の将来や周りのことを自分自身でどう決めて行くのかを真剣に考える機会が重要であったと改めてみている。

	<ul style="list-style-type: none"> 履修生の自覚の有無を別にしても、履修生は明らかに成長している。容易には気づいていないにしても、今後このプログラムでの経験が有益であったと振り返るであろう。
広報と産業界への展開	<p>【今後に向けての期待】</p> <ul style="list-style-type: none"> 大きな変革が日本の大学教育に求められているなかで、社会からは、大学の改革があまり進んでいないとの評価が続いているように思えるが、本取り組みは、博士課程教育改革の好事例であり、もっと広く一般の方々に認知していただくことが必要である。それによって、さらに多くの企業等からのサポートを得られることを期待する。 本プログラムがその養成を目指す「グローバル社会の文理統合型トップリーダー」は、現状の（日本）企業が最も必要とする人材であり、企業側からの積極的な参画が望ましい。本プログラムには既にいくつかの企業が参画し、その指導内容や履修生の成長を実感・理解していると言えるが、履修生の将来の広い活躍の場としての企業全般における理解度は未だ十分ではない。この点で、今回の具体的成果をベースにした大学側から産業界への積極的な理解促進活動の展開が望まれる。 大阪大学は、研究指向の大学・大学院である。その中で、このプログラムがあったということは、とても大きな意味を持っている。大学にとって何が大事なのか、特に、個別の専門を超えるところ（超域）にあるもの、それを実践されたということ、内外にもっとアピールすべきである。
成功要因とコストの分析	<p>【今後に向けての期待】</p> <ul style="list-style-type: none"> 履修生の能力の向上は外部評価も含め客観的に評価することができるが、本教育プログラムの中でどの部分はその向上に対して効果的であったのか、などのノウハウに繋がるものの蓄積がこのプログラムの財産になるはずである。是非、それを明確にして頂くことと、その財産を得るための本プログラムの投資対効果をみておくことも必要であろう。また、本活動を対外にアピールする機会の増加、その表現方法を工夫されて、今後の活動に生かしていただくことを望む。 本プログラムのブランドを上げることを考えてはどうか。このプログラムの5年間で履修生の方の成長はいろいろと評価されていると思う。履修生の成長が科学的に裏付けられれば、本プログラムのブランドが上がり人材育成の産学連携にも繋がるのではないかと思われる。
進路選択とキャリア形成の支援	<p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> 当初20名の1期生（5年制）は、全コースを終え実社会での新たなキャリアをスタートさせた者から、学位・資格取得や社会人経験のため暫く履修中断した者、さらには既に離脱した者等、様々であるが、離脱者を含めたほとんどの者が順当に卒後の進路を歩んでいる。これはある意味、関係の先生方が履修生一人ひとりの能力、適性やその置かれた状況に応じて、親切かつ柔軟なプログラム運用に心がけられた結果であり、十分なメンタリングがなされたものと評価できる。
履修生間の関係	<p>【改善すべき点】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学年間のつながり、同学年間でつながりが弱いようである。このプログラムでの総合力という知恵、気づきを継承することは大事である。このこと自体は特定のカリキュラムとして置く必要はないが、風土づくり

	<p>が求められる。これだけ多様な領域の履修生がいるので、折々に相互に話し、経験を交換できる機会をもっと作るべきである。横のつながり、縦の継承が必要である。</p>
卒業生による支援の循環	<p>【今後に向けての期待】</p> <ul style="list-style-type: none"> 卒業生が社会で活躍するまでに、もう少し時間がかかるのかもしれないが、彼らが社会を牽引するリーダーになったときには、必ずや母校を応援してくれるものと期待する。彼らからのサポートを得られるような好循環を達成するまで、本プログラムを維持し継続的に発展させていくことのできる仕組みを構築していただきたい。
継続への期待	<p>【今後に向けての期待】</p> <ul style="list-style-type: none"> プログラムの中では「超域イノベーション総合」と「超域イノベーション実践」は、最も越境的な意味合いも持っている、統合的な意味を持っている科目である。この科目に対して自己評価も、指導教員からの評価も特に高いものであった。それ故に、これに相当する科目を大阪大学で継承してほしい。こういう形式の科目こそ、今後の大学の基本、コアとなる科目ではないかと考える。「科目」としてではなくても相当する実践活動教育は重要である。 これまでの取り組みを通じて、どのような大学教育、特に大学院教育を行えば効果的であるのかについての良いモデルを提示された。リーディング大学院プログラムとその支援が終了した後も、是非、大阪大学としての高い目標を持って本取り組みを継続していかれることを期待する。 このプログラムでは、他者と協働する力が、自己評価では7割近くが、さらに教員から見ても、これは4割を超えて高い評価を得ている。加えて、専門以外の分野の知識を得たこと、そして国際性の形成は見事にプログラムそのものの特徴を反映したものと言える。したがって、本来ならこのままこのプログラムを継続していただきたいが、それがし難いのであれば、他の大学院プログラムでも良いので、継承していただきたい。10、20年後の履修生の成長を大いに期待する。 本プログラムの成果を大阪大学における今後の教育と研究の発展にどうインテグレートするかは、重要な問題である。なぜなら、超域イノベーション博士課程プログラムが設定した目的、目的実現のために毎年度の実績をふまえつつ展開してきた方法、そして生み出してきた養成の成果は、大学における教育と研究、さらには、21世紀における学術＝科学のあり方を変革する批判的建設的意味を多くもっているからである。大阪大学の第3期中期目標には、教育の最重要事項として「高度汎用力」が規定され、高度汎用力教育の全学展開のための拠点として「COデザインセンター」がすでに設置され、2019年度からはこの視点の学部教育への埋め込みが想定されている。また、大学院教育としては、新たな大学院支援制度としての卓越大学院プログラムにおいて本プログラムの成果継承が検討されうるということであり、これからの展開を期待したい。
国の制度のあり方	<p>【改善すべき点】</p> <ul style="list-style-type: none"> このプログラムの継続性が途中で終わることが、大学教育のある意味での欠点である。政府の肝煎りで各大学が開始したが、いずれも同じような状況である。政府の腰の入れ方が研究も含めて日本の大学の低迷に拍

	<p>車をかけている。折角良いプログラムを創っても、中途半端は成功を不成功に導く。もちろん、大学の今の状況を考えると、教授陣、独立法人に責任はない。ただ、気の毒なのは、学生である。</p> <ul style="list-style-type: none">• 卓越大学院プログラムにその思想は受け継がれるが、何か、一貫性のないところが気になる。政府の人達も感じるものはあるだろう。これでは、日本のどの大学も「現場の生の声」が届かず、机上の論理で教育が進行しないか危惧を覚える。研究、企業でも「現場に答えあり」である。• 本プログラムの展開過程に立ち会い、その明確な成果に接しつつ、本プログラムへの政府からの支援が終了するという時にあたり、次の感想を記しておきたい。本プログラムは、政府の大学院支援制度を利用して開発されたが、そのオリジナリティの高さは特筆すべきものがあった。日本全体の大学のパフォーマンスを改革するためには、個別のこのようなオリジナリティが自由に多様に展開されることがもっとも重要である。国の支援制度は予算と目的によって一律に大学を枠づける結果になりかねず、個々の大学のもつ潜在力を本当に発揮させるものになっているか問題なしとしない。大学のそれぞれの個性的取り組み、大学の中からの積極的イニシアチブを尊重し、オリジナリティの創造と発揮を多様性のなかで追求する主体性の強化と他方でそれをエンカレッジするシステム改革が求められている。
--	---